



保健科学院長メッセージ

大学院保健科学院長

伊達 広行

DATE Hiroyuki

本大学院保健科学院は、平成20年（2008年）4月（北海道大学内で17番目）に設置された比較的新しい大学院です。学部における5つの専攻（看護学、放射線技術科学、検査技術科学、理学療法学、作業療法学）の教育課程を基盤に、より専門性を高めることはもちろんのこと、他学部を含めた異なる学術領域にまたがる横断的な拡がりとし、それらを結びつける総合的な視座をもつことをねらいとしています。そして修士課程では、医療専門職における指導・管理能力の修養も強く要求されます。また博士後期課程では、それまでに学んだ深く広範な知識や技術を基に、暖めていたアイデアや発見を新しい独創性のある研究成果として結実させ、世に問うことを求められます。

本保健科学院には、保健科学と看護学の2つのコースがあります。修士課程保健科学コースは、生体量子科学、生体情報科学、リハビリテーション科学、健康科学の4科目群で、また修士課程看護学コースは、看護学に、公衆衛生看護学、助産学、高度実践看護学を加えた4科目群で構成されています。一方、博士後期課程保健科学コースは、先進医療科学と総合健康科学の2科目群、看護学コースは看護科学科目群から成ります。これらコースに加えて、修士課程又は博士後期課程の2年次から小樽商科大学大学院商学研究科のMBA（経営管理修士）特別コースへも進学でき、本科学院の学位（保健科学又は看護学）と小樽商科大学MBAの二つの学位（ダブルディグリー）を3年間で取得することが可能となっています。さらに、学内の複数大学院とJICAが連携し大学院教育を通じて発展途上国への国際貢献を進める「JICA開発大学院連携プログラム」にも参画しています。

昨今の医学と医療における課題は、移植・再生医療、遺伝子治療、感染症対策、少子・高齢社会や生活習慣病への対処など、多岐にわたっています。現在に繋がる日本の医学は、主として江戸時代にもたらされた西洋医学に端を発し、その後、幕末の内戦等による負傷者の手当てに大きな効果を発揮するとともに、古くから不治の病と恐れられていた疾病に対して、解剖学や細菌学などを通して科学的な根拠に基づく処置をもたらしました。謂わば、けがや疾病との闘いが、医学の発展の原動力であったと言えます。しかし今日、そうした「対処としての医療」にも増して、健康体もしくは病気等の前段階における予防と予知、健康維持・増進（殊に精神的な健康維持）、そして治療後の更正や老化への適切な対応が、切実に求められるようになってきました。このような趨勢を背景に、保健科学とは、「より良く生きるための支援」を目指し、広い意味での医学に属しながらも、大多数の人間が抱える今日の問題に正面から向き合い、既存の医学と連携しつつ社会の要請を見据えて進むべき、実践を重視した学術領域であるといえるのです。

北海道大学は、日本で最も多くの学部や研究施設を有する大学の一つです。大学院に重点を置く総合大学としての環境は整っています。どの課程でも大切なことは、称号を得ることよりも、専門家としての実力を身につけ人格を陶冶するとともに、修得したことや新たな知見をその後の活動に（あるいは人生に）生かすことにあると考えます。そのためには、「知ること」だけでなく「それを活かすこと」、また「やる気」だけでなく「実行し成し遂げること」が重要であるに違いありません。

この保健科学院で精一杯学び、皆さんが高度医療を担うリーダーとして、国内はもとより国際舞台上で活躍されることを大いに期待します。